

# 行政視察報告書

令和4年10月3日・4日

西脇市議会  
文教民生常任委員会

## 1 視察実施日及び視察先

- (1) 令和4年10月3日（月）  
多治見市立笠原中学校（岐阜県多治見市）
- (2) 令和4年10月4日（火）  
岡崎市役所、岡崎市立六ツ美北中学校（愛知県岡崎市）

## 2 視察事項

- (1) 岐阜県多治見市  
小中学校におけるICTの活用状況について
  - ・児童生徒のタブレットを含めたICT機器の活用状況について
  - ・教職員のICT活用スキルアップのための研修について
  - ・ICT支援員やICTサポーター制度の活用について
- (2) 愛知県岡崎市  
校内フリースクールについて
  - ・フリースクールF組設置に至る経緯経過
  - ・フリースクールF組の取組（教育内容、学力保障、約束事等）
  - ・在籍学級とフリースクールF組との関係・交流、生徒・保護者の反応
  - ・フリースクールF組の人的配置、財政措置について
  - ・フリースクールF組の成果と課題

## 3 参加者

### 文教民生常任委員会

委員長	東野 敏弘		
副委員長	高瀬 洋		
委員	藤原 秀樹	藤原 哲也	
	高瀬 弘行	吉井 敏恭	
	林 晴信	(村岡 栄紀 欠席)	
事務局	金子健太郎		

## 所 感

東野 敏弘

(1) 多治見市の小中学校における I C T の活用について

多治見市の『小中学校における I C T 機器の活用』についての視察は、多治見市教育委員会挙げての I C T 教育の取組の詳しい説明を受け、笠原中学校の授業参観をさせていただき、大変意義ある内容でした。

多治見市では、目指す子どもの姿として「I C T 機器を活用し、情報活用能力を高め、学びを深める子ども」とし、今年度の目標として、小学校は「どの教科でも誰でも I C T 機器を活かす」、中学校は「教科の学びを深める」としています。

学校への I C T 機器導入に際しては、現場の先生方も入った委員会で調査をして、iPad、キーボード、ペンシルに決め、昨年 2 月に全児童生徒・教職員に配布されたそうです。ただ、多治見市では、数年前から学級に 1 台の iPad が配備され活用されていたそうです。先生方の中にも、先行的に取り組みされていた方が多かったようです。

教育委員会内の教育研究所（3 人の正規職員）と経験豊富な元管理職の I C T 教育推進委員 3 人が中心になって、I C T 教育の推進が図られています。教育研究所が、I C T 教育推進に大きな役割を果たしていると感じました。また、元管理職の先生方が、I C T 機器の活用や I C T 教育の取組に従前から取り組まれていたことが多治見市の I C T 教育の広がりになったと思われまます。

教職員のスキルアップのための研修も計画的に進められています。個人研修として、休業中や空き時間、放課後を活用して I C T 教育推進員が講師として対応もされているということでした。また、夏季休業中に、初級・中級・上級の研修会が先生方の自主的な申し込みによって企画されていました。

さらに、日本教育工学協議会学校情報化先進地域を目指し、各学校で情報化優良校を申請中だそうです。現在、21 校中 8 校が優良校として認定されており、学校間で競うように I C T 教育が推進されているようです。

笠原中学校の授業も見せていただきました。1 年 A 組は合唱発表会の保護者向け案内文の作成、1 年 B 組と 2 年 A 組は英語、2 年 B 組は社会の授業でした。3 年生は、高校見学日だそうで、自習でした。生徒たちは、個人的にもグループでも、iPad を自由自在に活用していました。先生方も全員、iPad を上手に活用されていました。

笠原中学校では、iPad を授業だけではなく、生徒会活動や宿泊研修にも活用されているそうです。放送室でも、生徒が毎日活用して

いるとのことでした。教師用の「ICT活用ガイドブック」を毎年作成されており、中身の濃い視察でした。

また、笠原中学校の職員室も見せていただきました。先生方の机上には、パソコンが置かれているだけでした。ペーパーレスが進んでおり、昨年度紙代やインク代で30万円の削減ができたそうです。職員室には、3Dプリンターが置かれていました。教務主任の先生が日々・月毎の予定表もICT機器で発信していました。

ICT教育推進員が述べられた次の言葉が印象に残っています。『文房具のようにiPadを活用する。ノートとして、カメラとして、書き込み用として、動画で記録し、自分のまとめを発表する機器として活用する。また、友達との教え合いに、友達との交流に活用する。先生方が挑戦する場として活用する。』

西脇市の教育現場とは、残念ながら大きな隔たりがあると感じました。ただ、ICT教育の目指すべき方向を教えていただいたように思いました。

## (2) 岡崎市の校内フリースクールについて

岡崎市の『校内フリースクール』についての視察は、市役所でフリースクールF組の取組の説明を聞いた後、六ツ美北中学校のF組を見学させていただき、先進的な生徒観のもとでの取組を学ばせてもらいました。

岡崎市教育委員会は、教育長の教育理念「すべての子どもに光をあてる」ため、誰一人取り残すことなく、生徒が社会的自立に向かって歩み出せるようにしたいとの目標で、フリースクールF組を設置されたとのことでした。令和2年度に中学校3校に設置され、3年度に新たに5校、4年度に新たに6校設置され、現在20校中14校に設置されており、全校に設置予定だそうです。

フリースクールF組の理念は、①適応するのが子どもではなく学校である、②通常学級と同じ一つの学級として扱う、③多様性を受け入れられるエース級の教員が担任する、④いつでも温かく迎えられる支援員を市費で配置、⑤教室復帰ではなく社会的自立を目指す。

私は、フリースクールF組の取組を聞き、これまでの自分の教育観を覆されるような衝撃を受けました。問題を抱える生徒を学校になじませようと働きかけるのではなく、生徒のあるがままを受け入れ、生徒に寄り添って生徒の社会的自立を促していくことだという点でした。在籍学級への復帰が目的ではなく、生徒が社会で自立できるように、生徒自身の内面の成長を促そうとされています。そのため、生徒自身が自分の一日のプログラム（予定）を決めています。

六ツ美北中学校の校長先生は、「生徒が安心できる学校を創りたい。仲間がいることが実感できる学校を創りたい。」と話されていた。

ました。フリースクールF組のことを、先生方にしっかりと理解してもらい、生徒や保護者にも理解できるように様々な機会をとらえて『語られている』とのことでした。校長の姿勢が大切だと感心しました。

F組担任の先生は、「生徒の価値観に自分が合わせていくことが大切で、F組の理解者を増やしていくことが大切だ。」とも話されていました。さらに、中学校卒業後も、関係を継続していきたいとも話されていました。

フリースクールF組の影響で、六ツ美北中学校ではチーム学習（チームで分からないところを教え合う）に全先生方が取り組まれるようになったそうです。授業の中でチームを作り、生徒同士で教え合うことで学力が向上する波及効果が生まれているとのことでした。事実、学力の底上げが図られ、平均学力が向上しているとのことでした。

生徒を取り巻く環境が悪化する中、長期欠席者が増える傾向が全国的に広がっています。西脇市においても同様です。そうした現状にあって、岡崎市のフリースクールF組の取組は、大変先進的な取組で、是非参考にさせていただきたいと思いました。

なお、岡崎市教育委員会では、『岡崎市32人学級プロジェクト』を立ち上げ、市独自で令和5年度から32人学級を始めようとしています。4人を基本とした子ども同士のチームが自主的な学びを進めようとしています。さらに、教員の確保として、岡崎市任期付教員採用制度も創設されようとしています。

## 高瀬 洋

10月3日・4日の2日間、文教民生常任委員会の視察で、岐阜県多治見市と愛知県岡崎市を訪問しました。

この2つの自治体が選ばれた理由ですが、委員会では今年度ICTを活用した教育の在り方について調査研究を進めており、この分野に先進的に取り組まれている自治体として多治見市。また、学校への長期欠席者等にも温かく寄り添う学校づくりの取組が全国的にも注目されている自治体として岡崎市を訪問することになりました。

多治見市は、『小中学校におけるICT機器の活用』についての視察でした。その内容は、「児童生徒のタブレットを含めたICT機器の活用状況」「教職員のICT活用スキルアップの方法や成果」などです。

同市では、教育委員会内に教育研究所があり経験豊富なICT教育推進委員3人が中心となり、職員のスキルアップや相談等に取り組まれています。学校情報化先進地域を目指し、各学校が情報化優良校を

申請中だそうです。

人口10万人を超える多治見市が3人の推進委員で進めていることなど、スキルレベルに西脇市と差があるのかなあと感じましたが、本市もまだこれからなので頑張りたいです。

翌日は、岡崎市の『校内フリースクール』についての視察でした。その内容は、「フリースクールF組設置にいたる経緯経過」「取組内容・人員配置」「成果と課題」などです。

岡崎市役所で、フリースクールF組の取組について説明を聞いた後、六ツ美北中学校のF組を見学させていただきました。

フリースクールF組の理念である「適応するのが子どもではなく学校である」「教室復帰ではなく社会的自立を目指す」という言葉は印象に残り、教育委員会の取組の奥深さを感じました。学校への長期欠席の児童生徒に向き合う姿勢としての、あるべき姿を考える機会をいただいた気持ちです。

#### 藤原 秀樹

今回、多治見市のICT教育を視察して、西脇市と違いタブレット自体がサクサク動き、やはり通信に強いiPadだなと思いました。タッチペンも充電式の純正オプションで、選択基準は生徒の使いやすさや操作性、スマートフォン市場の動向などを考慮し選定されたそうです。生徒は誰もノートを持っておらず、ノートの代わりに全てタブレットに書き取り、提出物は書いたものや録音したもの、撮ったものを先生に送信して提出しています。また、毎日タブレットを持ち帰り、私たちのスマートフォン感覚で使用し、充電も家でしているそうです。セキュリティ上、22時～6時まではインターネット使用が不可にしていますが、多少の問題はあるそうです。iPadの更新は、使用期間が5～6年であるため、今回の更新を令和9年度に行う予定で、継続的なICT教育を計画されています。先生方のスキルも高く、職員室もペーパーレスが進み、1年間の紙代などで30万円の削減、その削減分をICT強化に使っています。また、市を挙げ、目標として日本教育工学協議会学校情報化先進地域を目指し、各学校で情報化優良校の申請をし、現在21校中8校が優良校として認定されています。多治見市には教育研究所があり、そこを拠点に夏季休業中の研修会や、毎年独自のICT活用ガイドブックを作成しています。さらに教材センター的なサーバーなどがあり、活用しやすくなっており、アプリの権限も管理職(校長)の許可でインストールが可能で、できるだけハードを低くし、積極的になんでもやってみようという空気が流れていました。やはり、ハードなどには思い切って将来を考え予算を使い、高い明確な目標を設定し、熱い思いをもったリーダーづくりをし、現場主導でチャ

レンジ精神を持ってしっかりした市独自のシステムを構築しなければならないと思いました。西脇市はまだまだ遅れているという印象です。

2日目は岡崎市の校内フリースクール(F組)を視察し、いちばんの印象は、校内フリースクール(F組)は教育の考え方でした。本当に子ども達の将来の為なのか、今でもこれがいいのか判断に迷っています。教育長の教育理念で「すべての子どもに光をあてる」「誰一人取り残すことなく社会的自立に向かい歩き出すことができるようにしたい」は良いと思うが、社会的自立させるのに、学校が子どもの言いなりになり、信頼の厚い先生を担任に充て、いつも側に支援員さんがいて、子ども達にストレスを与えないように配慮する。これで不登校を減らし学校に通わせる事ができたとしても、大人になって会社や社会で同じ状況で過ごせることができるのか？適応能力や忍耐力、努力、美德、強い精神などが養われるのか疑問があり、この考え方を推進し持続していくのに重要なのは人だと思います。この「F組理念」を教育長や校長が職員、生徒、保護者に語り理解させ続けていかないと本来の理念が持続することは困難だと思います。令和2年から始まっているが現在も長期欠席児童は増加傾向にあり、劇的に長期欠席者が減る特效薬ではないと思いました。

子ども達を自立させるのは良いと思うが、この考え方がホントの子ども達の自立につながっていくのか慎重に取り扱わなければならないと思います。

2日間の視察はとても勉強になりました。

## 藤原 哲也

### (1) 小中学校におけるICTの活用状況について

多治見市立笠原中学校への視察の目的は、GIGAスクール構想の取組の視察で、『ICTの活用状況について』学ばせていただきました。

多治見市も西脇市と同じ令和3年度から、一人1台のタブレットの運用が本格的に開始されたとお聞きしました。

多治見市の学校数が小学校13校、中学校8校で、合計21校をICT支援員3人で、1人の支援員が7校を担当しているとのことでした。教職員のスキルが高いと実感しました。しかし、教育委員会の説明では、最初からスキルが高い職員の方ばかりではなく、教育委員会が行う教職員のためのICT活用スキルアップ研修会開催の賜物であると感じました。

さらに、西脇市との違いを感じたのは、教育委員会の部署の中に教育研究所たるものがあり、その教育研究所で尽力されている方が元校長先生で、長年の経験を活かし学校現場をよく理解した上で、

多治見市版『ICT活用ガイドブック』を作成され、ガイドブックを軸に教職員のスキル向上に尽力されてきました。教職員に対して、きめ細やかな内容のガイドブックになっているため、ICTに詳しくない教職員の方でも、前向きにタブレットを使用した授業に取り組めた結果、教職員のスキルが向上し、子ども達もタブレットを使いこなせるようになったのではないかと授業を視察して実感しました。

西脇市教育員会に対し、西脇市版『ICT活用ガイドブック』を早急に作成することを提案します。今回、多治見市立笠原中学校のタブレットを使用した1・2年生の国語・英語・社会の授業も拝見させていただき、どの教室も先生が大型テレビを使用し、子ども達がiPadタブレットを無理なくトラブルなくサクサク使いこなしていました。

教育委員会から伺った話で、全国の生徒を対象にした「ICT授業のアンケート」で、タブレットを使用した勉強は学ぼうえで役に立っていると思いますか、との質問に対し、タブレットは役に立っていると回答した多治見市の生徒が、全国でも岐阜県内でも上位で、ほとんどの子ども達が勉強に役に立っていると感じています。このことが凄いことであり、より向上心が芽生え、さらにタブレットのスキルが上がる好循環で、多治見市のICTのスキルが向上する要因と考えます。

大半の子ども達が、タブレットの授業が役に立っていると感じていることは、クラスの子も同士でタブレットの使い方を教え合うことが習慣になっていると思われれます。なお、小学校には今回視察に行っていませんが、教育委員会からの話では、小学校でもICTタブレットを使用した授業は中学校と同じように進んでいるそうです。しかし、今後の課題をお聞きすると、小学校低学年で字を書くことも大切と感じています。さらに、ハード面とソフト面のベストミックスを考え見極めていきたいとの答弁を聞き、ICT教育を進める上で、大切な考え方と共感しました。

## (2) 校内フリースクールについて

愛知県岡崎市立六ツ美北中学校内フリースクール「F組」の設置状況及び運営の取組に関して視察させていただきました。この「F組」の創設は、岡崎市においても不登校児童生徒の増加が問題とされており、教育長の教育理念のもと誰一人取り残すことなく個別最適化の学びの場を保障し、子どもが社会的自立に向かって歩き出すことを願ってのことであると伺いました。

今回、六ツ美北中学校内に入ってすぐ1階に「F組」のプレートをかけた和室の教室があり、丸みを帯びたテーブルが置かれ、窓と

カーテンは開けてあり、ソファもあり、くつろいだ雰囲気のあるスペースで、タブレットを使ってテキストを学んだり、タブレットで絵を書いたりして各々が思い思いに過ごしていました。「大人数での集団生活が苦手」「30日以上欠席を経験した」等、さまざまな事情を持つ生徒のための学校での“居場所”「校内フリースクール」と実感いたしました。Fには「フリー」のほか、「ファン、フィット、フィーチャー」の意味が込められています。生徒が自由に登校して自分で時間割や登下校の時間をタブレットに記載していました。先生や支援員の方たちと共有できるように、生徒一人一人がその日に何をするのかもフリーに記載されていました。F組の生徒もタブレットを使いこなしておられました。

教育委員会や校長先生との懇談会で、「校内フリースクールF組は、多様な子ども一人ひとりの理解に努め、教室復帰だけでなく、社会的な自立を目指す、子どもの将来のための取組である。」との言葉に感銘しました。

岡崎市にも西脇市同様の校外施設、ハートピア岡崎という施設が2箇所ありました。不登校の生徒に対してF組担任の先生が家庭訪問し各支援員と連携・相談して、不登校の生徒に関わっておられ、生徒に寄り添う教育を今回学ばせていただく良い機会でした。

西脇市教育委員会にも一度岡崎市の教育委員会の取組を視察していただきたいと提案します。また、西脇市にも「校内フリースクール」の設置を要望します。

## 高瀬 弘行

### (1) 岐阜県多治見市の小中学校におけるICTの活用状況について

#### ① 視察の概要

最初に、多治見市の教育委員会からICTに関する取組状況の説明を受け、笠原中学校の1年生の国語と英語、2年生の英語と社会、3年生の自主学習の見学を行い、最後に教育委員会との質疑応答で終了した。

授業内容の概要として、国語（1年生）の授業では、時候の挨拶や挿絵などをタブレットから検索し、「保護者への案内文」の作成、また英語（1年生、2年生）では、タッチペンを用いた入力や録音機能を利用した発音の確認、社会（2年生）では、班別に生徒が主体となって課題に対して問いかけを行い、その回答などが記載されたタブレットが教室の大型モニターで共有化されていた。また、3年生は高校見学で自主学習だったが、2人の生徒がタブレットを用いて、英語などの自主学習に取り組んでいた。

#### ② 所感

まず、授業見学では、いずれも10分程度と限られた時間の中であったが、最も印象に残ったのは、すべての生徒が全く違和感なく、タブレットを取り扱っていることであった。まさに「文房具のように使用している。また修学旅行にも持っていき、カメラや記録に活用している。」との説明を裏付ける結果であった。そして、ICT支援員体制については、当初から学校の校長経験者など3人だけで、市内の小学校13校、中学校8校に関わり、現在では、中学校においてICT支援員が対応することはなく、小学校においても週に1回の巡回程度で収まっているとのことであった。そこで、昨年3月に全生徒に配置されて以来、短期間でここまで活用状況に達している指導方法に着目した。

まず、ICT支援員は、タブレット導入の過程で、各学校にICT担当教師を養成し、各学校の支援員との情報共有などに努め、その際のアイテムとして、初歩から具体的活用事例までをわかりやすく記載され、毎年更新される「ICT活用ガイドブックfor Teachers」が、ICT活用に関する先生方のスキルの水準化には大いに役立っているとの印象を受けた。また、教職員のICT活用に関するスキルアップ研修として、情報主任会、利活用研修、職務別部活研修、学校別研修、個人研修など、教師個々の実情に即した研修の在り方についても参考にすべき取組と考える。但し、西脇市の取組と比較するには、予算や教師の配置数などに留意する必要がある。

その他、職員室の見学では、入室した途端に違和感を覚えた。それは、先生方の机に書類などはほとんどなく、パソコンは言うに及ばず、大型モニター、プロジェクター、リーラーコンセント（天井からのコンセント）の設置など私の知る職員室とは全く異なっていた。そこで確認したところ、職員会議などの資料をペーパーレス化したことで年間30万円の削減が可能となり、3DプリンターなどICT関連機器の購入が可能になったとのことであった。

## (2) 愛知県岡崎市の校内フリースクールについて

### ① 視察の概要

最初に市役所において、教育委員会の担当者から、F組設置の経緯について、約40分間の説明を受けた。ここでは、長期欠席者（不登校という言葉はあえて使用していないとのことであった）の増加が大きな課題となり、「すべての子どもに光をあてる」という教育理念の実現に向けた取組として、広島市の校内フリースクールを参考に、①適応するのは学校であること、②通常学級として扱う、③多様性を受け入れられる担任（エース級の教員が担任）、④いつでも温かく迎える人がいる、⑤教室復帰ではなく社会的自立を目指す、

などのF組設置の理念が示された。

その後、六ツ美北中学校へ移動し、フリースクールを25分間見学した。そこでは、和室に改良された部屋に、丸やひょうたん形のテーブル、くつろげるソファなど生徒がくつろげる環境が作られ、一人の時間を作ることを目的にしたパーティションで仕切られた個室空間もあった。また当日は、牛乳パックを利用した花瓶づくりを教えあう生徒、タブレットを使っている生徒、ソファで休む生徒など、5人の女子生徒がそれぞれの学校生活を過ごしていた。また、支援員の方に確認したところ、生徒の登校を第1の目的とし、登校時間や帰宅時間、その日に活動したいことは生徒自らが決定することであった。

その後、校長室において、F組の担任教師も交えて、20分間の意見交換を行い、校長から「現在の子どもたちは、友達、勉強、部活、家庭、宿題など多くのストレスを抱えている。そのため、例えば宿題をやってもなくてもOKとするなど、生徒が安心して登校でき、生徒が安心できる学びあえる学校づくりを行いたい。」と、また担任の先生からは「女子会に近い。教師は自分の価値観を生徒に押し付けてきた。（それに耐えられない）あの子たちの価値観を自分（教師）に近づけることが大切。ジャニーズなどたわいのない話の中で、あの子たちの本音が出てくる」と述べられた。

## ② 所感

私自身、F組に対して、いわゆる不登校対策としての適応教室的なイメージを抱いていたが、それをはるかに超えた崇高な理念のもとに運営されていることを実感した。それは、視察に来た私たちに「箱を作っても意味がない！」と端的に指摘され、「岡崎市にF組を設置するに当たっては、あらゆる機会を捉えて、教育長自らが、その理念を保護者、生徒、市民に対して徹底的に周知してきた経緯がある。」と強く述べられたことから推察された。

具体的には「F組は、将来の岡崎市を担う若者が、社会生活に自立していくためにどうしても必要な事業であること。」を理解してもらうことであり、「駄目だから行くクラス」という偏見を払拭することであった。

その結果、全国的に「長期欠席者」が増え続ける中で、岡崎市では、F組導入の学校から徐々に減少傾向が見られており、これらの成功体験をもとに順次、各学校にF組が設置されているとのことであった。（令和2年度3校、令和3年度5校、令和4年度6校、現在20校中14校設置）

西脇市においても不登校は増加傾向にあり、F組の設置もその対策として、有力な検討対象になりえると考えるが、学校統廃合も控

えており、仮にF組の設置を検討するなら、保護者や生徒や市民にその理念をどのタイミングで、どのように理解してもらうかが、F組の設置に向けた課題と考える。

吉井 敏恭

(1) 岐阜県多治見市

小中学校におけるICTの活用状況について

ICTの可能性を生かした学習活動の取組について多治見市立笠原中学校を視察した。多治見市では、昨年2月に全児童生徒・教職員（児童生徒数≒7,700人／教職員数≒590人）にiPad・キーボード・ペンスルの配布がなされた。

ICT機器の選定にあたっては、使い慣れたスマートフォンに着目して操作が簡単であることを最優先したとのことである。（導入単価は約6万円）

昨年2月に導入され、現在、その取組が注目されることとなったのには、平成24年度から（許可を得て）私物のiPadを使用する試行を重ねたことが基盤となっている。

教育研究所（教育委員会内）と、経験豊かな（OB教職員の）ICT教育推進員を中心に、ICT教育の推進が図られている。

ICTが得意でない教職員に対するICT教育推進員のサポートも十分であり、夏季休業を利用したスキルアップ研修会も実施されている。

各学校では、日本教育工学協議会学校情報化先進地域を目指しており、情報化優良校の申請中である。現在、21校中（小学校13校、中学校8校）8校が優良校として認定されているとのこと。

視察により特筆すべきは、平成24年度からの試行錯誤を基盤にICT教育を推進している、ICT機器の選定において使い易さを最優先したこと、各学校の予算等により教師用デジタル教科書の購入が可能であること、管理職の許可によりアプリのインストールが可能であること等があげられる。

また、ICT推進の効果が、職員室のペーパーレス化に確認され、年間30万円の経費削減を生んでいる。

ICTに取り組む教職員の自信が生徒に伝わるのか、各教室での参観ではiPadを自由自在に活用する“ゆとり”が見受けられた。

今後、多治見市でも、自宅へのiPadの持ち帰り、機器の更新が今後の課題となっている。

(2) 愛知県岡崎市

校内フリースクールについて

まず、岡崎市役所（議会事務局 会議室）で「校内フリースクー

ル（F組）について」の取組の説明を受けた。

耳慣れない「F組」について視察先の六ツ美北中学校の設置要項（令和3年4月1日施行）の目的に、「心理的、情緒的な要因等により六ツ美北中学校に登校したくてもできない状況にある生徒、何らかの問題を抱えており、通常の学級に入れない状態にある生徒に対して、社会的な自立に資するため、六ツ美北中学校内の適応指導教室を発展的に解消し、フリースクールを設置する。」とある。

全国的に不登校児童生徒の増加が問題とされる中、教育長の教育理念「すべての子どもに光をあてる」に基づき新設された。

「F組」には指導力のある「エース級」の教員を担任として、令和2年度にまず3校を設置。教職員の意識の変化や深まり、在籍学級の支援や指導の態勢の変化などの成果を見極めつつ、令和3年度に8校（+5校）、令和4年度に14校（+6校）と拡大している。

（市内中学校20校の内、14校）教育長の教育理念に基づく「F組の理念」を常に語り、生徒や保護者への理解の浸透を心掛けてきたとの説明を受けた。実績を重ね拡大する意気込みが確認できた。

続いて岡崎市立六ツ美北中学校に移動して、校内フリースクール「F組」を視察した。「F組」は校舎入口すぐの和室にあり、4人の生徒に出会った。

私自身が抱いていた「暗い」誤ったイメージを払拭する、明るさに「F組」の意義を再確認した。

担任の教員とも面談し「子供を学校に適応させるのではなく、学校が子供に適応する」との意識改革の大切さを知った。

残る中学校にも「F組」を拡大すること、小学校への新設にも取り組みたいとの岡崎市の意欲を確認した。

西脇市においても「すべての子どもに光をあてる」取組は重要であり、心理的、情緒的な要因等により登校したくてもできない状況にある生徒を支援する必要がある。

## 林 晴信

### (1) 多治見市（市立笠岡中学校）

最初に驚いたのがICT支援員（ICT教育推進委員として教育委員会に属している・会計年度任用職員）が3人で小中21校をカバーしていることだった。しかも当校の支援員は元中学校の校長先生。「多治見市の教育方針も理解しているのでいいですよ」と笑って言っていたが、なかなかできることではないのではと思った。よくよく聞いてみると、多治見市では平成24年度から各学級1台のiPadを市独自予算で導入しており、その旗振り役をしていたのも当時教諭だった現支援員だった。GIGAスクール構想での端末購入や学

習支援アプリ導入でも、ベースができていたので支援員の的確なアドバイスのもとスムーズだった様子が伺えた。

支援員を委託ではなく直接雇用するメリットは、ノウハウの蓄積やICT教育方針への直接的な関与（アドバイスだけでなく）が挙げられるが、多治見市においてはいかに発揮できているように思えた。西脇市でも今年度半ばから、委託オンリーから直接雇用形態も取り入れたのは正解だと思う。

授業を視察すると、西脇市との最大の違いは、ICT支援員がバタバタしていないことだった。これはすなわち生徒たちがつまづくことなく極めてスムーズにタブレットを駆使しているということである。シームレスなICT活用は第一段階の到達点だが、完全にクリアしているように思えた。

これは、平成24年度からの先んじた取組の成果でもあろうし、西脇市と違ってタブレットは持ち帰って家庭学習でも役立てるものにして点だろう（なお、西脇市では5月の視察時点では持ち帰り不可・現在は可となっている）。習うより慣れろなのである。なお、家庭での使用制限については、西脇市と同様にキッズフィルター、夜間使用制限として、時間外になれば使用できなくなるロック機能で対応している。また家庭へのネットリテラシー対策としては、保護者への同意書、参観日等を利用しての勉強会で対応している。これは西脇市も同様だが、今後は一段階上げて、デジタル・シティズンシップ教育※への取組も必須になってくると思われる。

再度授業に話を戻すと、欠席者の対応として、授業をタブレットで中継していたが、教師がタブレットの側に行き、「聞こえているか」「話が伝わりましたか」等々の確認をしていたが、なかなか大変そうだった。当初GIGAスクール構想にはオンライン授業への取組は想定外だったが、コロナ禍のさなか始まったGIGAスクール構想なので、オンライン授業への対応は必須だろうと思う。西脇市ではこの点を踏まえて、カメラやマイク等々機材購入の補正予算措置を今年度行ったが、ここは先んじていると評価できる。あとはどう活用できているかは、予算の検証としても当委員会管内視察の必要がある。

多治見市含む東農地域は昔から東農教育と呼ばれるくらい教育熱心なところだと聞いた。教育研究所が設置されているし、学校内にも「幼保小中一貫教育！」との張り紙も見受けられた。調べてみると、訪れた笠原中学校にも「多治見市笠原幼保小中一貫教育研究会」という組織があり、保護者や教育関係者で構成されていた。

ICTに関しても国のGIGAスクール構想に先駆けて、平成24年度から市費でのタブレット導入（1学級に1台）があり、その当

時もまれた教職員が10年後の今に教師やICT支援員として活躍できているということなのだろう。先見性というか、あるべき未来を描いて今何をすべきかというバックキャスト思考が根付いているようにも感じた。

「自由にやらせてもらってます」と元校長のICT支援員は笑顔で言っていたし、現中学校の教務主任は「ICTに関しては、(ICT支援員を指して)あの方が校長の時にその下で鍛えられましたから」と笑っていた。職員室の教務主任の机の上には2つのディスプレイ(デュアルモニターという)が設置され、ノートパソコンとタブレットが置かれていた。総じて言えるが、職員室の教員の机の上にはペーパーがほとんどない。西脇市の中学校ではどうなんだろうか。

そして、職員室の中央には3Dプリンターが置かれていた。中学校に3Dプリンターがあるのも珍しいと思ったので、尋ねてみると、「今後、生徒たちに使わせようと思ってます。これからはこういうのも必要になってくるだろうと思ってますんで」という答えが返ってきた。全国では3Dプリンターの教育実践もポツポツとはできているようだが、西脇市ではSTEAM教育の一環としてどう捉えているのだろうか気になるところである。

文部科学省では来年度(2023年度)予算として、162億円の「子供の学びDX」事業費が概算要求されているが、その中の事業で、「先端技術・教育データの効果的な利活用のための実証ではセンシング(画像認識や音声認識)、メタバース・AR(拡張現実)・VR(仮想現実)、AI(人工知能)、ファブスペース(3Dプリンター・レーザーカッター等)など先端技術の利活用について実証研究(6か所・1年間)を行う。」とある。西脇市でも手を挙げるようなことがあれば嬉しいし称賛するのだが。

最後に、ICTの取組では、知識もスキルもノウハウも結局のところその蓄積によるところが多分にある。蓄積とは伝え手と受け手の相互作業である。しかもこのデジタル社会のスピードに対応するには、従来のアナログ手法で伝えては間に合わず、学校側(教師側)がよりICT技術やAIの活用に革命的に取り組む必要があるんだろうと思う。

#### ※デジタル・シティズンシップ教育

- ・デジタル・シティズンシップとは、デジタル技術の利用を通じて、社会に積極的に関与し、参加する能力のこと。デジタル・シティズンシップ教育とは、優れたデジタル市民になるために、必要な能力を身につけることを目的とした教育(引用:文部科学省)
- ・情報モラル教育(ネットリテラシー教育)とはインターネットの危険

性を認識させるものに対し、デジタル・シティズンシップ教育は、「正しく理解して、もっと便利で、楽しく、幸せな社会生活ができるように活用する力をつけよう。その力を社会に役立てよう」というポジティブで積極的なデジタルの学びを指す。

(2) 岡崎市（市立六ツ美中学校）

テレビで初めて岡崎市のF組の取組を見た時から、是非行って実際に話を伺ってみたいと思っていたので、非常に楽しみにしていた。

西脇市でも不登校者の数はまだまだ上昇傾向にある。なお、不登校は30日以上のカウントをいうので、学校へ行きづらさを感じる児童生徒の数はもっと多い。

そして、児童生徒が通う場としては、学校内では教室・保健室、そして学校外に適応指導教室「はればれ教室」が存在している。そして毎日ではないが、NPO等が運営している「てとて広場」等のサードプレイスもある。

私が子どもの頃は学校というものは「行かなければならないところ」だった。健康等の理由がなく学校へ行かないことは「ズル休み」であり、怠け者のすることと言っていた時代である。学校へ行かないことはズルいことだったという意識である。私自身、小学校生のある時期、保健室に通っていた日々があった。何がきっかけで何が理由かはよく覚えていない。反発心があったらうし、何となくそちらのほうが居心地が良かったという程度だったようにも思う。

児童生徒によって学校に行きづらさを感じる理由は様々で、おそらく深刻度も様々なんだろうと思うが、私が懸念するのはそれが後年まで「ひきこもり」に繋がらないようにしなければならないということである。いわゆる8050問題が社会問題化して久しいが、そこに繋がっていかないよう、社会との関係性をロストしないようにするのが課題だと考えている。

また西脇市内では学校統廃合問題で、特に小規模特認校である双葉小学校廃校へ強い抵抗感を示す市民もいる。双葉小学校自体は公立フリースクールではないのだが、現実には本来の校区の小学校への登校しづらさを感じる児童たちにも利用されていることもあり、行き場を失う懸念の声当事者を問わず発せられている。西脇市立学校学習環境規模適正化検討委員会の答申でも附帯意見として「現行教育システムに適應することが難しい児童生徒への支援体制の再構築と居場所の環境整備」が明記されているが、それらの解決策として岡崎市のF組の取組が参考になるのではないかと考えている。

F組の取組手法等については他ページにも書いてあるだろうから割愛するが、F組の理念で素晴らしいなと思ったのが「適應するのは子どもではなく学校である（適応指導教室ではない）」と「教室

復帰ではなく社会的自立を目指す」である。「このことを勘違いしている教師は多いんです、私もかつてそうでしたが」と笑ったのは校長先生だった。そういう意味でいけば、「西脇市では適応指導教室でしっかり対応しているので大丈夫です！（キッ）」だとか「適応指導教室から教室復帰している児童生徒も少なくありません！

（キッ）」とか答弁をよくしているのはどうなんだろうとも思う。令和3年度西脇市の教育に関する事務の点検及び評価の報告でも適応指導教室からの復帰率は重点課題とされていて、「出席率の向上を図ることができた」が成果として報告されているが、F組の取組を聞いた今は「それでいいのか？」と勝手に思う。もちろん、現行の枠内で教育委員会も現場の教師も一生懸命に頑張っているとは思っているのだが、頑張る方向はそちらでいいのかというのが素直な疑問である。

私のかつての経験上、居心地の良さとはある種の緩さがないといけない。

F組を設置している学校でも保健室登校をする生徒がいるが、「それもいい」。F組は基本的には申請をしている生徒が利用するものだが、「ちょっと疲れたから3日間だけF組に行って、また在籍学級に戻る」という使い方をする生徒もいて、「それもいい」のである。1回や2回、F組に行ったからといっていちいち保護者にも報告しない（多くなると連絡することのこと）という緩さも生徒にとっては安心感に繋がっているんだと思う。型にはめられることに違和感を感じて不登校になる児童生徒もいるのだから、杓子定規に型にはめないことが大事なんだろうとも思う。

ただ、私は唯一の懸念として、そんな緩さが冒頭にも書いた「ズルい」に繋がり、差別やいじめの原因になったりはしないかという点があったので、尋ねてみた。

当初、教育委員会にもその不安はあったようだが、実際に取り組んでみると、生徒の方が理解があり、もちろん、折に触れて多様性や生きづらさを抱える子どもたちの話をしている成果もあったと思うが、大きなトラブルはないそうである。そしてまた教師の間にも、F組の様子や支援・指導のあり方を目の当たりにして意識が変わり、在籍学級の支援や指導の態勢も変化してきているという相乗効果も生んでいるようだった。

実際にF組を訪問して、生徒たちと話をしてみても、みんな明るい様子で、はきはきと応えてくれた。内面では激しい葛藤がある生徒もいるのだろうが、F組の居心地はいいんだろうなというのがよくわかる。学びの手法もさまざま、ここでもタブレットが大いに活用され、授業をオンラインで視聴していたり、ドリルをやっている

たり、また下の学年の授業を視聴することで学び直しに利用する生徒もいるそうだった。D X（デジタル・トランスフォーメーション）とはデジタル技術を活かして人の生活をよりよいものに変革することであるから、これこそまさにD Xだなあと思ったことも追記しておきたい。

F組の取組は年々導入校を増やしていき、小学校への導入も視野に入れているという。導入が拡大しているというのが、成果があることの何よりのエビデンスだろう。

細かい提言ではなく、教育委員会にはまずは岡崎市へ行ってF組の取組を研究すべし！と提言したい。